

巻頭言：「子どもと学校理解の体験学Ⅱ」をふりかえる

担当教官 元兼 正浩

福岡教育大学では1999(平成11)年度より学年進行で新カリキュラムを実施しており、本年度はその完成年度にあたる。そこで教育学領域における新カリキュラムの目玉の1つであった「子どもと学校理解の体験学Ⅱ」の担当者として、この4年間の自身の教育実践のあゆみ(ゆらぎ)を自省的にふりかえっておきたい。

「子どもと学校理解の体験学Ⅱ」(1年後期)は、1年前期に初等／教育心理幼児教育コース及び中等／実践学校教育コースの選択必修として実施される「子どもと学校理解の体験学Ⅰ」の後継に位置する。しかしながら、この体験学Ⅰが半期(約15回×2時間)を3つの時期(4～5回×2時間)にわけて、各期で「事前指導－実地体験－事後指導」という流れを担当教官とグループを入れ替えながら実施するのに対し、この体験学Ⅱでは3～4名の教官のもとで各グループに分かれて半期を通してじっくり1つのテーマに取り組む点が決定的に異なり、それぞれの特長を形成している。

体験学Ⅰでは子どもたちが学校内外のあらゆる場(僻地校、児童養護施設、少年院等)にいることを「浅くとも広く」をモットーに体感することに重点を置いているのに対し、体験学Ⅱでは「狭くとも深く」理解することに重点を置いているものと私は捉え、テーマと成果の表現方法にこだわった。

1年目は初年度ということもあり担当者会議で明確な役割分担がなされ、私は学校領域の担当となり、「異文化理解」をキーワードとすることが課せられた。そこで内なる国際化として公立小学校に在籍する在日コリアンの子どもたちについて、近年急増している「ニューカマー」とよばれる子どもたちについて、そして朝鮮初中級・高級学校で学ぶ子どもたちについて、調べ、訪問調査し、再考して、その学びの成果を「新聞づくり」という技法を用いて表現した。可能な限り系統的、体系的に学習してきた成果をいったん細かく分解し、その学びのピースをコラム、社説、スポーツ、4コマ漫画、TV欄…と新聞が有する形式に当てはめ直す作業は予想以上に手間暇のかかるもので、結局、完成までにさらに半期を要した。だが、担当者自身がまったく専門外のテーマだったこともあって新鮮な驚きの連続を受講生と共有しながらのたいへん充実した一年となった。この新鮮な驚きを保つためにその後、毎年テーマを替えていくことになるが、その功罪は以下で検討したい。

2年目は学校外の担当となった。ちょうど1歳と4歳の子育てに追われていた時期でもあったので、テーマとなるキーワードを「子育て支援」とした。すると幼児教育領域を志望する学生が大半を占め、そのニーズは児童虐待(をすする母親の心理)について学びたいというものであった。私の行政学的な関心との折り合いがつかないまま、まずは宗像サンリブやゆめタウンの子どもの遊び場や保育園、団地の公園、育児サークルなどに足を運び、母親たちにインタビュー調査を行った。その結果、児童虐待の背景としての社会政策の問題、子育て支援施策の不備や行政情報の不十分さ等に気づき、宗像市関連部局へのヒアリングなどに調査研究をシフトさせ、その成果を「子育てママさんパパさんいらっしゃい」というホームページの立ち上げで表現した。これは子育て中で困っている人がどのような手続きを踏めば行政の子育て支援が得られるかを調査結果を「ふまえてわかりやすく示したページ」や子育て中の母親、父親たちが育児の悩みを相談しあえる「掲示板」などで構成されていた。HPは万人がアクセスできる方法の1つとして有効な試みではあるが、その後の管理を維持できず、表現方法としての課題を残した。

3年目はふたたび学校領域の担当となった。この年は担当者が岡垣東中学校の学校評議員となっていたこともあって、テーマを「開かれた学校」とし、その調査対象領域を岡垣町東部に焦点化した。この岡垣東中学校の校区にある戸切小学校は東中とともに県内で最も早く学校評議員制度を導入した学校であり、小規模校対策として町内全域から入学可能な通学区域の弾力化や、小規模校ゆえ学校行事(文化祭や運動会)の地域との共同開催を積極的に行っている「開かれた学校」である。東中学校区内のもう一校である山田小学校も「開かれた学校」をコンセプトとしてこの年、オープン・スクールを新設したところであった。そこでこの3校の訪問調査を中心に、戸切小学校で開催された学校評議員制度のシンポジウムへの参加や岡垣東中学校への学習ボランティア(調理実習など)を行った。その成果は岡垣町安部教育長を実地指導講師としてお招きし、意見交換の中で提案させていただいたが、明確な施策プランの提唱には至らなかった。また、この演習では、ボランティア参加などを

通して、「閉ざされた」学校を「こじあける」ことを模索したが「足(免許さえ!)がない」「時間がない」「お金(交通費)がない」「調理やパソコンが教えられない」1年生の問題を痛感した。

4年目は学校給食を題材に選んだ。学校給食は子どもの生命にも関わる問題であると同時に私的領域と公的領域の接点にも位置するため、子どもの権利保障のあり方と学校の役割、さらには財政的問題も絡んで教育行政(地方自治)について再考することを目的とした。テーマ設定時、岡垣町に学校給食の一部民営化問題が浮上して揺れていたこともあって、その論点をニュートラルに確かめたいという思いもあった。ただ、受講生のニーズは後掲のレポートテーマ一覧にみられるように多様で、給食問題の奥深さを実感することになった。ここでは各自の研究したいテーマを最大限尊重し、卒業研究を将来執筆することを想定しながら、「大きな」問題関心を「小さな問い」に分け、「ずらし」ながら、研究テーマに焦点化し、仮説を立て、それを実証する方法を検討することから着手した。各自のテーマと自主性を尊重しすぎた余り、全体的に取り組みが遅れたことや共通テーマが設定できずグループ全員での訪問調査に1度しか行けなかったことなど反省点も多々ある。しかしながら各人が多様な手法で調査し、学部1年生にしてはきちんと課題を絞りこんだ報告書としてまとめられている。民営化問題に関する記述などについては、私の今回の調査研究を通じて得られた知見及び個人的見解とは全く異なるが、給食問題を教育学的視点から重層的に検討した研究成果としてこの小冊子を岡垣町樋高町長をはじめ関係者に提出したいと思う。

以上、各年度ごとのテーマと成果の表現方法について紹介しながら、それぞれの反省点について整理した。内容知を伝授する旧来型の教授-学習というスタイルから、小中高の「総合的な学習の時間」よろしく方法知を身につけさせるための学びの支援者として教官自身の自己認識をパラダイム転換させるためには、未知のテーマが望ましいと考え、毎年テーマを変えていった。だが、継続性や深まりといった意味でそれが妥当であったかどうか心許ない。ただ、その時々で担当者が最も関心を寄せていた問題にこだわり、毎年一定の成果を目に見える形にしたことは意味があったと思える。

この体験学Ⅱの場合、担当教官(グループ)ごとにその内容や方法に大きなバラツキがあるため、受講者の満足度を得られたかとても気がかりであったし、毎年、毎年「昨年より、さらに失敗した」という思いでいっぱいになった。精神的負担、物理的負担のとても大きい授業であった。だが、新カリキュラム導入によって廃止された1・2年生の形式ルーム制に見合うような関係がこの授業を通じて生まれていることを考えるとき、とても大切な「いとおいしい」時間であったと今は思える。

毎年毎年さらなる失敗を繰り返し、その最たるはずの本年度の受講生から思いがけなくも心温まる色紙をもらい、また新たな関係をこれから築けたであろうことを思うと締めつけられる思いがするが、深い感謝とともに距離が離れようとも関係が今後も続くことを約束し、またこれからもこのような授業スタイルを21世紀の大学人として模索していくことを肝に銘じ、その返礼としたい。

(2003年3月15日脱稿)